

「木は地球を救う」 — 22

細田木材工業(株)

顧問 細田 安治

明治神宮の大鳥居

◇初代(第一)の鳥居

話は明治時代に遡る。ご維新から明治27年(1894年)で日清戦争、10年後の明治37年(1904年)日露戦争のさなかの日本は、物資が全て不足していた。特に当時の最重要資源として木材は極端に不足し輸入材に頼っていた。

特に大鳥居の材料としての、檜の巨木を入手することは夢物語であった。木材が如何に世の中に必要、かつ重要な資源でありその木材を調達し供給し、世の中のお役に立てている「木材や」は社会的、経済的にもなくてはならぬ存在であったことを強調しておきたい。

このような状況の中で、一の鳥居の調達を求めていたのは日露戦争のさなかの明治37年(1904年)であった。

◇台湾からの輸入

日本政府は台湾からの輸入を計画し、明治41年(1908年)台湾の最高峰^{にいたかやま}新高山(3,990m)に連なる阿里山系に手つかずの檜の原生林を発見、林学博士である琴山河合(河合鉢太郎)により調査した結果、自生している植物は、熱帯、暖帯、湿帯の植物が密生し植物の宝庫であった。

高度1,800mを越えると樹齢1,000年を越える^{べにび}紅檜(台湾檜)であった。

◇^{ありさん}阿里山系の開発

余談だが、台湾には3,000m級の山がなんと200座以上ある。最高峰は玉山(^{にいたかやま}新高山)3,990m。

ちなみに日本では最高峰の富士山をふくめて21座を数えるのみだ。高山の数は日本の10倍以上ある典型的な高山国だ。尚新高山とは日本統治時代に富士山(3,770m)より高く新しい高山として新高山と名づけられた。大東亜戦争開戦時の暗号「ニイタカヤマノボレ」に使われたことはあまりにも有名であり、ご存知と存じますが念のため。現在は玉山と改名、^{ぎょくざん}高山登山のメッカとして観光名所になっている。高度は富士山より高いが、登りやすい山としてハイカーにも人気がある山だ。筆者も登ってみたいが?登れるかな?

阿里山とは、正式には阿里山国家風景区として嘉義県にある15の山からなる国家風景区で、最高峰の大塔山は2,663mである。

日本政府は、中央部の都市嘉義市から阿里山の



新高山(玉山)



軍艦で横須賀軍港に運ばれた台湾木材

横須賀港に軍艦で運ばれた台湾檜の巨木



原宿駅に到着した台湾木材

原宿駅に到着した巨木

麓まで約72キロに渉り山岳鉄道^{わた}を敷設、林業局を編成組織して本格的な森林の開発に乗り出した。

◇宝の山発見

台湾総督府の協力のもと森林を調査し、新高山につながる阿里山の一帯にある手つかずの檜の原生林を発見した。正に宝の山である。日本政府は台湾総督府の協力を得て阿里山の麓の街である車呈^{しやてい}まで72kmの山岳鉄道を敷き、木材の生産を開始した。

このような経緯のなかで、遂に鳥居の材料としての巨木を発見した。正に台湾人の協力で手に入れることができた。鳥居のほかに明治神宮の神殿や玉垣と称する垣根などにも大量に使われている。

他の神社で主だったところは、靖国神社の神門や、葦原神宮の神門拝殿、東大寺の大仏殿の垂木など日本の多くの神社仏閣に台湾檜が使われている。このほかにも当時の日本全国の神社に使われている台湾檜はこのような経緯で手に入れることができたのである。



玉垣



初代の大鳥居

このように、苦心惨憺して台湾から運ばれた巨木は、木造日本一の鳥居として大正9年(1920年)に建立され、明治神宮のシンボルとして参拝者に崇められ、半世紀にわたり厳粛に威容を誇っていた。

しかし、関東大震災など度重なる災害と風雪による老朽化の為、お役目を終えたとして、昭和45年(1970年)新しく建て直すことになった。

この第二の鳥居を建て直すにあたって、更なる困難が待ち受けていたが、日本人の神を敬う心と、台湾人の神を敬う心とがひとつになって、巨木を探し当て、明治神宮の第二の鳥居の建立につながったの

である。正に感動的なストーリーであり、筆者も大いに感動した次第である。この建て直された鳥居に関する詳細は次号で報告します。今号ではひとまず、一の鳥居が生き返りお役目のストーリーをご報告する。

◇第二のお役目

明治神宮初代の大鳥居は、昭和41年(1966年)7月22日の落雷でお役目を終え、昭和51年(1976年)武蔵一宮氷川神社の二の鳥居として、移築されお役目を続けている。



氷川神社の赤鳥居

地元大宮では、明治神宮の鳥居を頂くことは、目出度いこととして大歓迎。明治神宮から鳥居が到着した時には、神社正門から2キロにわたり、住民が参道の両脇に詰めかけ到着を祝った。

大きさは明治神宮時代と変わらぬ寸法だが、半世紀の歳月を耐え抜いたこともあり、若干傷みがある。氷川神社では傷みを修復し、赤く色をつけた。赤は明るく生まれ変わり目出度いこととしている。

◇日本人の木を敬う心

自然に恵まれた森林には神の御霊が宿るとされている。日本人の持っている木との関係は素晴らしいものだ。榊、玉串神に捧げる心、木に対する信仰は、台湾も同じであり、この鳥居は台湾人の心が詰まった木である。

権禰宜 遠藤氏談

当氷川神社の境内には、皇紀2600年(昭15年)を記念して植えた楠が大きくなった。楠は須佐之男命が眉毛を植えた。とも言われている。台湾にも楠が多く、楠は樟脳となって防虫剤、カンフルオイル(天然樟脳オイル)、麻酔薬、強心剤となる貴重な資源、鍾馗様ともいわれ悪魔を退散させ、八岐大蛇(ヤマタノオロチ)退治などで有名な神様に関係のある樹である。

明治天皇が維新の時、氷川神社に来られた、須佐之男命は台湾開発の遺産であり感慨深いものがある。

このように、明治神宮でお役目を終えた大鳥居は、木を大切にする日本人と台湾人は共通点を持っている。続く

参照 Uチューブ台湾さくらテレビ 明治神宮と台湾人の心、ネット、ウィキペディア他